



Title	昭和戦前期の普通選挙と北海道第3区：道南と政党
Author(s)	井上, 敬介
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 162, 1(左)-34(左)
Issue Date	2021-02-26
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.162.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80580
Type	departmental bulletin paper
File Information	1001_bfhhs.162.l1.pdf



昭和戦前期の普通選挙と北海道第3区 ——道南と政党——

井 上 敬 介

序

本論は昭和戦前期の北海道第3区（函館市と桧山、渡島支庁管内）における普通選挙（1928年2月の第1回普通選挙から1937年4月の第5回普通選挙まで）の得票数を検討することで、候補者の選挙地盤と政党の勢力変遷を明らかにすることを目的としている。その際、以下の3点に着目する。

第1に、函館市には札幌市の北海道支部と別に、二大政党（立憲政友会と立憲民政党）の函館支部が存在した。他の都市部（小樽、旭川、室蘭、釧路、帯広市）には「支部」が存在しない。政友会函館支部の発足は同党札幌支部の発足よりも6か月早い1901年1月11日¹、民政党函館支部の発会式は1928年7月25日である²。同選挙に際して、中立から政友会に転じた佐々木平次郎（当選3回）は「函館市に於いて政党の完全なる発達を希望し得るるかについては、過去に於ける実例に徴し、造る事は出来るも、成長は可なり容易の業にあらずと思はる」と語っていた³。本論は佐々木の予想に反し、函館市において政党間競合が激化していったことを指摘する。

第2に、政党内閣期の3度の普通選挙において、第3区は政権与党が野党に対して勝利していた。第1回普通選挙において落選した民政党（野党）の北林屹郎は選挙直後、「選挙民は一部の知識階級を除くの外、やはり官権万能、事大思想に囚はれ、鉄道、築港、港湾、道路等の問題に釣らるるのみならず、因習的の買収は可なり大規模に行はれたる模様候。今日の如く、尚、選挙

民の自覚なきに於ては何の時代に於てか、真の政治が実行せらるべきか、遺憾千万の事に有之候」と述べていた⁴。本論では、北林が指摘した事大主義的傾向が政党内閣期における3度の普通選挙を通じて、第3区における有権者の投票行動に見られたことを指摘する⁵。

第3に、第3区は道内唯一の3人区であり、政党内閣崩壊後の2度の普通選挙において、既成政党批判を掲げる渡辺泰邦が政友会候補を上回る2位当選（民政党候補の大島寅吉に次ぐ）を果たしていた。1937年4月の第5回普通選挙において、渡辺は「東方会の選挙方針は既成政党撲滅と林内閣打倒である事は変りがたい」と主張していた⁶。渡辺は民政党時代から中野正剛の一派であり、協力内閣運動に加担した後、民政党を脱党した。脱党後は国民同盟を経て東方会の中核メンバーとなり、組織部長に就任した⁷。北海道第2区の林路一（昭和会）、第4区の赤松克磨（国民協会）と北勝太郎（中立）の当選（赤松は第5回普通選挙のみ当選）とともに⁸、渡辺の検討は北海道における既成政党批判の高揚を解明する作業の一助となるだろう。

本論の考察の結果、道南政治が二大政党の競合状況から、三党鼎立状況へと変動していったことが明らかとなる。

第1章 政党内閣期における北海道第3区

第1節 1928年2月の第1回普通選挙と二大政党化

第1回普通選挙（田中義一政友会内閣が実施）の第3区の当選者は民政党公認の平出喜三郎（元代議士、函館商業会議所会頭、函館市）、政友会公認の黒住成章（前代議士、司法参与官、弁護士、函館市）と佐々木平次郎（前代議士、樺太建網漁業水産組合組長、函館市）、落選者は民政党非公認の北林屹郎（道議、江差新聞社長、江差町）、労働農民党非公認の加藤貫一（弁護士、函館市）である（〔表1〕）。

1926年に内務省警保局が作成した「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」は、平出（憲政会）を「多年、公職者トシテ且ツ市内一流名望家トシテ一般商工業ニ信望アリ」、「当選確実」、黒住（政友会）を「多年、公職者トシテ将

昭和戦前期の普通選挙と北海道第3区

〔表1〕 第1～5回普通選挙における北海道第3区の候補者別得票数

候補者名	所属	結果	函館市	桧山支庁	渡島支庁	合計
第1回普通選挙						
平出喜三郎	民	当選	9,141	169	6,560	15,870
黒住成章	政	当選	3,250	3,859	8,103	15,212
佐々木平次郎	政	当選	9,176	683	2,973	12,832
北林屹郎	民	落選	434	3,655	1,671	5,760
加藤貫一	労農	落選	1,984	35	463	2,482
第2回普通選挙						
前田卯之助	民	当選	7,574	1,183	6,709	15,466
佐々木平次郎	政	当選	6,446	3,623	2,748	12,817
渡辺泰邦	民	当選	4,211	1,694	5,670	11,575
平出喜三郎	政	落選	4,179	879	4,841	9,899
大島寅吉	民	落選	3,908	2,531	2,672	9,111
第3回普通選挙						
佐々木平次郎	政	当選	8,825	3,773	5,715	18,313
林儀作	政	当選	6,227	2,996	7,998	17,221
大島寅吉	民	当選	5,848	2,701	4,678	13,227
渡辺泰邦	民	落選	3,307	978	3,549	7,834
前田卯之助	民	落選	3,422	688	2,709	6,819
第4回普通選挙						
大島寅吉	民	当選	8,909	3,398	7,965	20,272
渡辺泰邦	中	当選	8,375	1,573	6,211	16,159
登坂良作	政	当選	4,898	2,652	4,911	12,461
須田幸太郎	政	落選	2,563	1,662	4,206	8,431
白尾宏	民	落選	3,362	730	2,465	6,557
第5回普通選挙						
大島寅吉	民	当選	6,834	3,181	4,364	14,380
渡辺泰邦	東	当選	6,628	1,567	4,032	12,227
田代正治	政	当選	3,606	2,032	3,319	8,957
大田半三郎	民	落選	1,586	1,485	5,412	8,483
幡野直次	民	落選	634	892	2,867	4,393

〔表 2〕 北海道第 3 区の政党別得票数

函館市	政	民	他	桧山支庁	政	民	他	渡島支庁	政	民	他
(1)	12,426	9,575	1,984	(1)	4,542	3,824	35	(1)	11,076	8,231	463
(2)	10,625	15,693	0	(2)	4,502	5,408	0	(2)	7,589	15,051	0
(3)	15,052	12,577	0	(3)	6,769	4,367	0	(3)	13,713	10,936	0
(4)	7,461	12,271	8,375	(4)	4,314	4,128	1,573	(4)	9,117	10,430	6,211
(5)	3,606	9,054	6,628	(5)	2,032	5,558	1,567	(5)	3,319	12,643	4,032

(注)〔表 1〕以降,「政」は立憲政友会,「民」は立憲民政党,「労農」は労働農民党,「中」は中立,「東」は東方会を指す。〔表 2〕～〔表 7〕において,(1)～(5)は第 1 回から第 5 回までの普通選挙,「政」は立憲政友会,「民」は立憲民政党,「他」は労働農民党,中立,東方会を指す。いずれも,「第十六回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局,1928 年),「第十七回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局,1930 年),「第十八回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局,1932 年),「第十九回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局,1936 年),「第二十回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局,1937 年)から作成した。

タ弁護士元老トシテ支部郡部ヲ通ジ信望厚シ,「当選確実」,佐々木(新政倶楽部)を「公職者トシテ,中央,地方共ニ尽力シ,且ツ露領方面本邦漁業家ノタメ尽力シ,努力実行ノ人トシテ一般ニ信望アリ」,「当選確実」,北林(憲政会)を「道会議員トシテ多年道政ニ参与シ,選出区桧山支庁管内ニハ信望アルモ一般ニハ伝シ」,「当落不明」,加藤(労働農民党)を「労働農民党ニハ党ヲ利用スベク入党シタルヤニテ信望ナシ」,「当落不明」と評しており⁹,順当な選挙結果だったと言えるだろう。

政党別得票結果を見ると,田中内閣の与党の政友会の得票は函館市,桧山,渡島支庁管内において,民政党を上回った(〔表 2〕)。桧山支庁管内では,江差,瀬棚町と熊石,奥尻,利別,東瀬棚,太櫓村において政友会,泊,上ノ国,厚沢部,乙部,貝取澗,久遠村において民政党が上回った(〔表 3〕,〔表 4〕)。渡島支庁管内では,福山,森町と尻岸内,湯川,戸井,亀田,尾札部,白尻,大島,小島,福島,吉岡,大野,茂別,七飯,鹿部,砂原,長万部村において政友会,上磯,八雲町と榎法華,銭亀沢,大沢,知内,木古内,落部村において民政党が上回っている(〔表 5〕,〔表 6〕,〔表 7〕)。

ここで,候補者別の得票数から,選挙結果を検討する。函館市に着目すると,政友会は佐々木,民政党は平出に集票している。両者ともに,函館市に

〔表3〕 桧山支庁管内町村における政党別得票数（1）

江差町	政	民	他	泊村	政	民	他	上ノ国村	政	民	他
(1)	579	568	21	(1)	203	242	0	(1)	206	336	1
(2)	545	607	0	(2)	189	344	0	(2)	284	541	0
(3)	744	564	0	(3)	346	253	0	(3)	615	368	0
(4)	461	459	184	(4)	206	271	57	(4)	415	383	90
(5)	197	582	174	(5)	81	347	61	(5)	130	659	122
厚沢部村	政	民	他	乙部村	政	民	他	熊石村	政	民	他
(1)	315	401	4	(1)	239	462	0	(1)	419	348	1
(2)	291	546	0	(2)	318	693	0	(2)	407	595	0
(3)	549	323	0	(3)	470	624	0	(3)	652	455	0
(4)	367	343	131	(4)	330	582	264	(4)	424	422	201
(5)	138	507	172	(5)	216	494	237	(5)	163	253	202
奥尻村	政	民	他	利別村	政	民	他				
(1)	477	157	0	(1)	725	316	2				
(2)	361	411	0	(2)	699	378	0				
(3)	371	471	0	(3)	1,047	300	0				
(4)	294	344	61	(4)	576	315	246				
(5)	163	618	65	(5)	370	658	173				

（注）泊村、江差町と合併（1955年）。熊石町、八雲町と合併（2005年）。利別村、今金町に改称（1947年）。

における圧倒的得票が勝因だった。（〔表1〕）。桧山支庁管内では全町村において、政友会が黒住、民政党が北林（江差町が地元）に集票している。渡島支庁管内では、政友会が福山、森町と尻岸内、榎法華、銭亀沢、亀田、尾札部、白尻、大島、小島、大沢、福島、吉岡、知内、大野、茂別、鹿部、砂原村において黒住、民政党が上磯、森、八雲町と榎法華、湯川、銭亀沢、戸井、亀田、尾札部、白尻、福島、吉岡、木古内、大野、茂別、七飯、鹿部、砂原、長万部村において平出、福山町と大島、小島、大沢村（松前地方）において北林に集票した。このように、政友会は桧山、渡島支庁管内において黒住に集票し、佐々木との競合を避けることに成功した。他方、民政党は桧山支庁管内で北林に集票したが、渡島支庁管内では平出と北林の同士討ちとなっ

〔表 4〕 桧山支庁管内町村における政党別得票数（2）

瀬棚町	政	民	他	東瀬棚村	政	民	他	太櫓村	政	民	他
(1)	534	247	2	(1)	460	67	1	(1)	244	241	2
(2)	348	524	0	(2)	487	88	0	(2)	330	195	0
(3)	571	372	0	(3)	576	35	0	(3)	382	181	0
(4)	256	250	175	(4)	375	122	86	(4)	285	236	29
(5)	134	289	156	(5)	251	382	44	(5)	77	386	21
貝取澗村	政	民	他	久遠村	政	民	他				
(1)	43	94	0	(1)	98	345	1				
(2)	70	164	0	(2)	173	322	0				
(3)	177	92	0	(3)	269	299	0				
(4)	108	72	16	(4)	217	329	33				
(5)	33	82	63	(5)	79	302	77				

（注）東瀬棚町と太櫓村が合併し、北桧山町となる（1955年）。貝取澗村と久遠村が合併し、大成村となる（1955年）。瀬棚町、北桧山町、大成町が合併し、せたな町となる（2005年）。

た¹⁰。これは、北林が公認されなかったことと関係している（後年、民政党を除名）。

他方、労働農民党は1926年8月4日に函館支部を発足させ、同年10月の函館市会議員選挙において2名の市議を当選させていた。同選挙では、政友会と憲政会が18名ずつ獲得し、労働農民党は発言力を確保した（中立2名）。なお、加藤は労働農民党の函館支部長だったが、市議選に落選していた¹¹。1928年2月の第1回普通選挙における加藤の得票に着目すると、函館市以外では得票を伸ばすことができていない（〔表1〕）。

政友会北海道支部（札幌市）は、第1回普通選挙において「積極政策の政友会」と「消極政策の民政党」という対立点を提示していた¹²。佐々木の立候補宣言には「姑息なる消極退嬰の政策を排して盛んに積極的経綸を行ひ、以て萎縮沈滞せる財界の恢復を図り、国家国民の暢達を期せずんはある可からず、蓋し、産業立国、地方分権、教育刷新の三大政策の実行を緊要とする所以も亦、茲に存ず」とある。黒住の立候補宣言もまた、「政友会累年の主張た

る積極政策によりて不景気を挽回し、国民と共に昭和維新の新政に献替すべく、既に本年度予算及各般の重要法案を掲げて第五十四議会に臨んだのであります」と、田中政友会内閣の積極政策を高唱している¹³。1927年1月、黒住は政友会（当時は野党）の賛成を得て「渡島半島西海岸線鉄道敷設速成に関する建議」（瀬棚町から久遠、熊石、乙部村、江差町、上ノ国村を得て福山町に至る鉄道の敷設）を提出していた。同建議は「渡島半島には開拓すべき農耕地は少ないが、水産・林業等の天然資源が豊富で、北海道開発上重要であるばかりでなく、経済上においても重要である」というものであり、第1次若槻礼次郎内閣期の第52議会において可決されていた¹⁴。政権交代の結果、桧山、渡島地方の有権者は与党の政友会に地方利益の実現を期待したのだろう。

北海道第二期拓殖計画において、道南の地域開発の優先順位は低下していた。1926年の長輪線（長万部、輪西間）開通に際して、佐々木は「この長輪線の建設運動に対し、函館市以外の地方の人々は寧ろ冷淡であつた。その理由は長輪線建設費を以てすれば、奥地の鉄道線を多く敷設することが出来るから長輪線に巨額を投ずるは拓殖上の効果が少ない。故に奥地鉄道の敷設を急ぎ、その完成と共に新町村を出現せしむることは拓殖の本旨に添ふものであるとの議論が有力で、常に鉄道予算は奥地方面のみに吸収せらるる有様であつて、政治的实力の及ばなかつたのは事実であり、従つて運動容易に其効を奏せなかつたのは事実であつた」と述べていた¹⁵。内陸開発の観点から、鉄道敷設が犠牲にされてきた結果、道南の有権者は政権与党に期待するようになったのだろう。1928年2月の第1回普通選挙の際、桧山支庁管内では黒住の得票が北林を上回った（〔表1〕）。北林は『江差日日新聞』（桧山地方の言論活動の中心）の編集、江差経済会（江差築港の建設、鉄道敷設など、陳情活動の中心となる）、江差水力電気株式会社、江差冷蔵庫の創立に携わるなど、江差町の有力者だった¹⁶。

江差町と政友会の密接な関係は、原敬内閣期に遡る。1919年12月、江差町民大会は「江差鉄道築港期成同盟会」を結成、1920年11月には江差町有志が「木古内鉄道敷設」（上磯鉄道を木古内村まで延長、さらに分岐して江差、

〔表 5〕 現在の函館市の渡島支庁管内町村における政党別得票数

尻岸内村	政	民	他	搬法華村	政	民	他	湯川村	政	民	他
(1)	390	286	7	(1)	174	182	0	(1)	330	285	13
(2)	191	673	0	(2)	84	308	0	(2)	381	400	0
(3)	480	496	0	(3)	239	206	0	(3)	515	289	0
(4)	287	316	425	(4)	120	213	96	(4)	523	434	165
(5)	74	185	222	(5)	14	141	25	(5)	178	639	215
銭亀沢村	政	民	他	戸井村	政	民	他	亀田村	政	民	他
(1)	407	433	9	(1)	447	433	13	(1)	599	309	19
(2)	102	943	0	(2)	196	846	0	(2)	444	581	0
(3)	438	622	0	(3)	455	605	0	(3)	683	380	0
(4)	284	748	269	(4)	392	502	243	(4)	545	535	293
(5)	49	474	158	(5)	113	401	154	(5)	201	682	271
尾札部村	政	民	他	臼尻村	政	民	他				
(1)	357	315	5	(1)	223	154	2				
(2)	182	588	0	(2)	191	287	0				
(3)	401	443	0	(3)	350	139	0				
(4)	216	596	68	(4)	192	317	61				
(5)	61	410	53	(5)	100	245	64				

(注) 湯川町、函館市に編入 (1939 年)。尾札部村と臼尻村が合併し、南茅部町となる (1959 年)。銭亀沢村、函館市に編入 (1966 年)。亀田市、函館市に編入合併 (1973 年)。尻岸内町、恵山町に改称 (1985 年)。恵山町、搬法華村、戸井町、南茅部町、函館市に編入 (2004 年)。

福山町に敷設する)を代議士の黒住(政友会)と佐々木(中立)に請願した¹⁷。1921 年 12 月の第 45 議会(高橋是清政友会内閣)において、上磯鉄道の延長工事と江差、松前方面に通じる鉄道の逐次着工が確定した¹⁸。木古内線の実地測量は 1924 年 7 月までにほぼ終わっていたが、護憲三派内閣の財政整理断行によって、10 月に打ち切りとなった(その後、復活)¹⁹。同内閣の蔵相は憲政会の浜口雄幸であり、江差町の有権者は、1928 年 2 月の第 1 回普通選挙において浜口総裁の民政党に負の印象を持ったのだろう。2 月 10 日の江差町民大会において「堀井安則氏は中央集権より地方分権たる自治体を力説し、地租移譲問題を論結」しており²⁰、江差町における黒住の進出の背景には、政

〔表6〕 現在の函館市以外の渡島支庁管内町村における政党別得票数（1）

福山町	政	民	他	大島村	政	民	他	小島村	政	民	他
(1)	641	155	4	(1)	389	110	0	(1)	204	97	1
(2)	429	389	0	(2)	264	326	0	(2)	82	274	0
(3)	454	388	0	(3)	379	253	0	(3)	263	143	0
(4)	287	184	421	(4)	334	136	198	(4)	206	107	160
(5)	94	248	290	(5)	56	155	106	(5)	55	94	129
大沢村	政	民	他	福島村	政	民	他	吉岡村	政	民	他
(1)	133	135	2	(1)	645	129	12	(1)	271	162	0
(2)	69	260	0	(2)	286	548	0	(2)	109	355	0
(3)	203	154	0	(3)	585	339	0	(3)	200	307	0
(4)	140	105	168	(4)	393	311	160	(4)	141	103	288
(5)	25	100	121	(5)	88	304	155	(5)	18	117	111
知内村	政	民	他	木古内村	政	民	他	大野村	政	民	他
(1)	306	318	1	(1)	390	514	4	(1)	581	445	21
(2)	220	483	0	(2)	231	823	0	(2)	552	515	0
(3)	421	385	0	(3)	501	801	0	(3)	710	462	0
(4)	255	418	169	(4)	331	545	535	(4)	490	390	236
(5)	98	411	99	(5)	154	588	280	(5)	340	449	145
上磯町	政	民	他	茂別村	政	民	他	七飯村	政	民	他
(1)	839	1,063	154	(1)	450	64	0	(1)	596	285	43
(2)	967	1,279	0	(2)	367	205	0	(2)	577	628	0
(3)	1,170	1,014	0	(3)	495	197	0	(3)	961	429	0
(4)	818	693	533	(4)	338	211	109	(4)	504	437	317
(5)	465	746	478	(5)	180	256	88	(5)	176	624	192
鹿部村	政	民	他	森町	政	民	他	砂原村	政	民	他
(1)	192	148	5	(1)	847	568	23	(1)	324	112	3
(2)	59	316	0	(2)	525	1,160	0	(2)	114	390	0
(3)	272	112	0	(3)	1,173	810	0	(3)	283	267	0
(4)	121	231	68	(4)	717	717	475	(4)	234	301	90
(5)	66	245	58	(5)	352	1,133	324	(5)	126	441	89

（注）福山町、松前町に改称（1940年）。大島村、小島村、大沢村、松前町に合併（1954年）。吉岡村、福島町に合併（1955年）。茂別村、上磯町に編入（1955年）。上磯町と大野町が合併し、北斗市となる（2005年）。森町と砂原町が合併し、森町となる（2005年）。

〔表 7〕 現在の函館市以外の渡島支庁管内町村における政党別得票数（2）

八雲町	政	民	他	落部村	政	民	他	長万部村	政	民	他
(1)	681	963	61	(1)	180	220	2	(1)	480	346	59
(2)	467	1,383	0	(2)	107	381	0	(2)	393	701	0
(3)	1,156	918	0	(3)	279	284	0	(3)	647	493	0
(4)	453	892	318	(4)	130	308	100	(4)	666	677	246
(5)	61	1,970	34	(5)	30	410	15	(5)	145	1,175	156

（注）落部村，八雲町に編入（1957 年）。

友会の地租移譲論への支持もあったと思われる。

他方，民政党函館支部の稲川広光は「自分は先月，渡島，桧山支庁管内の各郡部を視察して種々感じた事があるが」，「政治的勢力は政友会の勢力にあらずして黒住氏の勢力であつたのである。即ち政友会の地盤にあらずして黒住党の地盤であつたのである。従つて民政党に対して特に悪感情を持つて居るものは左程多からずして可成り，同情の多い事も痛感したのである」と述べており²¹，函館市以外では黒住個人への支持票が多く，状況次第では民政党に投票する有権者も多かったようである。第 3 区は浮動票が多く，道南の政友会優位は盤石ではなかった。

以上のように，1928 年 2 月の第 1 回普通選挙では道南政治の二大政党化が顕著なものとなった。

第 2 節 1930 年 2 月の第 2 回普通選挙と民政党

第 2 回普通選挙（浜口雄幸民政党内閣が実施）の第 3 区の当選者は民政党公認の前田卯之助（道議，函館時事新聞社長，函館市）と渡辺泰邦（元函館市議，興民会会長，函館市），政友会公認の佐々木平次郎（前代議士），落選者は政友会公認の平出喜三郎（前代議士）と民政党公認の大島寅吉（道議，雑貨商，函館市）である（〔表 1〕）。政友会が 2 議席から 1 議席に減退したことに対して，民政党は 1928 年 7 月の平出（函館支部長）の政友会入党によって，議席なしとなっていたが，2 議席を獲得した。

政党別得票結果を見ると，浜口内閣の与党の民政党の得票は函館市，桧山，

渡島支庁管内において、政友会を上回った。前回選挙と比較すると、政友会の得票は桧山支庁管内ではほとんど変化していないが、函館市において漸減、渡島支庁管内において激減している（〔表2〕）。桧山支庁管内では、利別、東瀬棚、太櫓村を除く全町村において民政党が政友会を上回った（〔表3〕、〔表4〕）。渡島支庁管内では、福山町と大野、茂別村を除く全町村において、民政党が政友会を上回っている（〔表5〕、〔表6〕、〔表7〕）。代議士の黒住成章の病死（1928年7月17日）と平出の政友会入党に対する反発の結果として、渡島地方の政友会票の多くは民政党に移動した。

ここで、候補者別の得票数から、選挙結果を検討する。函館市では前田、佐々木、渡辺が1、2、3位を獲得し、それが当選順位に直結した。民政党から政友会に鞍替えした平出は、前回選挙から大きく得票を減退させ、落選した（〔表1〕）。桧山支庁管内の全町村において、政友会は佐々木に集票した²²。例えば、江差政友倶楽部は一致して、佐々木を推薦している²³。他方で、民政党は泊、乙部、久遠村において大島に集票した以外、3候補の競合となった。渡島支庁管内において、政友会は森、八雲町と尻岸内、楳法華、湯川、尾札部、大野、茂別、七飯、鹿部、長万部村において平出、大沢、吉岡村において佐々木に集票した。民政党は楳法華、尾札部、臼尻、鹿部村において前田、大島、小島、大沢、吉岡村において渡辺に集票した。渡島支庁管内では、政民両党ともに同士討ちとなった。なお、3位当選の渡辺は、福山町と尻岸内、亀田、大島、小島、大沢、福島、吉岡、知内、木古内、落部村において得票数1位となった²⁴。稲川広光のように、平出から渡辺に鞍替えした者も多かったのだろう²⁵。他方、大野民政倶楽部は民政党の3候補の中で渡辺を推薦したが²⁶、大野村の得票は前田が248票を獲得し、209票の渡辺を上回っている²⁷。道南の民政党員には渡辺への反感もあったことがわかる。

渡辺は興民会という「党中党」を結成したことで民政党函館支部から疎外されていたが、中野派だったことから、本部の公認を受けることができた²⁸。元来、興民会は1922年の第1回函館市議員選挙の際、渡辺が「市政の極端なる政党化」を予防するために結成したが、欧米視察から帰国した渡辺が中心となり、1928年5月、「更に道政及中央政治の革正」を目的に、再結成され

【表 8】 北海道会議員選挙における道南の政党別得票数

函館市	政	民	他	桧山支庁	政	民	他
(9)	7,431	6,117	2,652	(9)	4,634	0	2,126
(10)	8,919	6,534	322	(10)	5,188	0	2,971
(11)	4,758	8,057	314	(11)	5,164	0	3,256
渡島支庁	政	民	他				
(9)	6,920	5,806	2,509				
(10)	8,199	6,533	3,995				
(11)	8,747	7,393	1,260				

(注)「政」は立憲政友会,「民」は立憲民政党,「他」は中立,労働農民党,社会民衆党を指す。(9)は第9期北海道会議員選挙,(10)は第10期北海道会議員選挙,(11)は第11期北海道会議員選挙を指す。北海道議会議事局編『北海道議会史』(第3巻)北海道議会議事局,1962年,3,4,460,461,462頁,北海道議会議事局編『北海道議会史』(第4巻)北海道議会議事局,1963年,2,3,4頁,『北海タイムス』(1928年8月5日,1932年8月4日),『小樽新聞』(1936年8月1日)から作成。

た²⁹。11月3日,興民会は函館市において復興大会を行ったが,恩賀徳之助(民政党函館支部幹事長),道議の前田と大島も参加していた³⁰。興民会会則には「本会は函館市並に渡島,桧山両支庁管内に於ける本会の主義綱領に賛同する立憲民政黨員並に一般有志を以て組織す」とある³¹。興民会の機関誌『興民』は,同年8月の第9期道議選(後述)において,興民会が「渡辺泰邦氏外幹部が,七月下旬協議の結果,本会は今回施行の普選最初の道会議員総選挙を特に重大視して,立憲民政党函館支部公認候補者全部を極力応援することに決定し,八月二日を皮切りに,同九日迄郡市両方面に於いて応援演説を試みたが,最終日の函館市は近來の盛会であつた」,「而して八月十日選挙施行の結果,市部に於いて,大島寅吉,前田卯之助氏共に高点にて当選し,郡部に於いては,黒島豊太郎氏,大田半三郎氏の二名当選したるも,幡野氏が遂に力戦の効なく落選したのは実に遺憾であつた」と述べている。興民会の前田への応援演説は9回,大島は17回,幡野は18回,大田は7回,黒島は1回だった³²。興民会と民政党函館支部との蜜月関係がわかる。

だが,1929年4月,興民会は「社告」として「超党派」を掲げ³³,興民会幹事長の小川弥四郎(函館市議)が「雑誌興民は興民会の機関雑誌でもなけれ

ば民政党の提灯持でもない」と公言するなど³⁴、民政党函館支部と決裂する。これは、渡辺が恩賀との函館支部長争い³⁵に敗北したためだろう。

本論が着目したいのは、浜口内閣の緊縮政策が渡辺の興民会と相容れないものだったことである。1929年12月の鉄道編成過程において、瀬棚線は昭和6年度完成が1年繰り延べなり、「木古内、江差間」は着手年度の1年、完成年度の3か年繰り延べ、「木古内、福山間」は着手年度、完成年度とも3か年繰り延べとなった。予定通りとなったのは、木古内線のみだった³⁶。田中内閣下で決定していた函館市への高等水産学校設置は、浜口内閣によって繰り延べられた³⁷。他方、1928年11月3日の興民会の決議は「第二期北海道拓殖計画の速進を期す」、「渡島、松山両支庁管内に自動車道路網の急設を期す」、「渡島、松山両支庁管内各郡に漁港修築の速成を期す」、「渡島、松山両支庁管内未設鉄道建設の速成を期す」、「函館港湾の改修並漁港修築の促進を期す」、「渡島半島に高等教育機関の急設を期す」、「函館市に外国貿易語学校の設立を期す」など³⁸、政友会のような積極政策が並ぶ。

興民会庶務部の岡田幸助（函館市議）は「上磯鉄道より福山へ連絡する鉄道は目下工事中であるか、如何に鉄道が完成し、交通の便が拓けても産物が出ないならば、何等発展の望みがない。故に、少なくとも吉岡に船入濶式の漁港、福山には幾分大規模の漁港を急設し」、「目下、盛に唱道されつつある江差鉄道の開通を視るなれば、鬼に金棒と云ふ事となるであらう」、「瀬棚は古い歴史を有しておる港であるが、港湾として未だ何等設備が整つて居ない。今や国縫よりの鉄道は時間の問題で開通の運びに近づいて居るが、此際、瀬棚港は一大理想的の漁港の新設を急務とするものである」と述べている³⁹。また、小川は「将来、函館市が膨張発展すればする程、附近町村との経済的連鎖関係を度外視する訳にはゆかぬ。市民の生活必需品の供給を仰がなければならぬ点から考へても、或は函館市に工業が勃興し、原料を安く供給を享けなければならぬ立場から鑑みても、これを閉却することは、詰まるところ、函館市民の不利益である。道南各町村問題の道路問題が今日まで閉却せられ来つた一半の責任は、各町村の努力が足りなかった点もあるが右翼都市である函館市が無関心であつたことも大にその責任を分ち負ふべきものである

う」と主張する⁴⁰。渡辺の支持勢力は港湾、道路、鉄道の整備による函館市と道南諸地域との連結を企図していたのである。こうした興民会の主張は、道南の浮動票を渡辺に引き付けたと思われるが、民政党の緊縮政策には逆行していた。

1930年2月4日の『函館新聞』によると、渡辺は「緊縮は目下の急務にして、臆ては好景気の到来を信じて疑はぬ。失業解決も其根本は財界の安定と産業の発達に俟たねばならぬ」と演説しており⁴¹、表面的には浜口内閣の緊縮政策に同調していた。だが、渡辺本来の立場は民政党内閣の緊縮方針に背離していた。昭和恐慌の深刻化にともなって第3区の有権者が金解禁政策の放棄を望んだ時、渡辺は協力内閣運動に加担する。

以上のように、1930年2月の第2回普通選挙の段階から、道南政治は三分化の兆候が見られた。

第3節 1932年2月の第3回普通選挙と渡辺泰邦

第3回普通選挙（犬養毅政友会内閣が実施）の第3区の当選者は政友会公認の佐々木平次郎（前代議員）と林儀作（道議、函館日日新聞理事、函館市）、民政党公認の大島寅吉（道議）である。落選者は民政党公認の渡辺泰邦（前代議員）と前田卯之助（前代議員）である（〔表1〕）。政友会は1議席増の2議席、民政党は1議席減で1議席となった。前回衆議院選と同様、二大政党の党勢は、政権交代によって逆転した。

政党別得票結果を見ると、与党の政友会の得票は函館市、桧山、渡島支庁管内において、民政党を上回った（〔表2〕）。桧山支庁管内では、乙部、奥尻、久遠村を除く全町村において、政友会の得票が民政党を上回った（〔表3〕、〔表4〕）。渡島支庁管内では、尻岸内、銭亀沢、戸井、尾札部、吉岡、木古内、落部村を除く全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表5〕、〔表6〕、〔表7〕）。2月10日の『八雲新報』は「永年培つかい来つた野党民政の金城湯池である我が八雲町を急転一変して与党となりし政友会が其の威力に依り、何処迄切り崩し得るか、齊しく町民が興味を以て見て居る処である」、「野党たる民政党が選挙戦に於て唯一の武器たる言論戦に主力を注いで居る

ことは否み得ない事実である」と報じている⁴²。民政党は金城湯池の八雲町でさえ、政友会の得票を上回ることができなかった。

候補者別の得票数から選挙結果を検討すると、函館市では佐々木、林、大島が1、2、3位の得票を獲得し、前回同様、それが当選順位に直結した（〔表1〕）。桧山支庁管内では、政友会が泊、貝取潤、久遠村において佐々木、東瀬棚、太櫓村において林、民政党が泊、上ノ国、乙部、太櫓、貝取潤、久遠村において大島に集票した。渡島支庁管内では、政友会が尻岸内、亀田、大島、小島、砂原、長万部村において林に集票した。民政党は小島村において大島に集票したことを除き、3候補による同士討ちとなった⁴³。例えば、2月16日の『函館毎日新聞』は「上磯民政クラブは大島、渡辺、前田の三派に分離し、各独自の立場になつて支援している」と報じている⁴⁴。政友会もまた、「政友会候補林、佐々木両派は地盤協定所か、共ぐひの惨状を暴露する」状況だった⁴⁵。

政民両党ともに、広域で地盤協定に失敗していたが、両党の明暗を分けたのは政権との距離だった。2月3日の『小樽新聞』は「林氏又、我が党内閣を背景に有利に戦況をすすめつつある」、6日の同紙は「函館市は兎に角として由来、事大思想の郡部は前回の総選挙当時と殆ど形勢を一変している」と評している⁴⁶。林は渡島支庁管内において得票1位となっているが（〔表1〕）、これは旧黒住派が支持したため⁴⁷、渡島地方の有権者の意向は流動的である。他方で、民政党の前田は前回選挙において渡島支庁管内の得票数1位だが、最下位に後退した（〔表1〕）。渡辺は中野正剛の腹心として1931年12月の協力内閣運動に加担し、民政党政権を崩壊に追いやった経緯があった（中野は民政党政権崩壊と同時に脱党）。協力内閣運動の目的は金解禁政策から金再禁政策への転換にあったが⁴⁸、1932年2月の第3回普通選挙において渡辺は「金再禁の結果を見よ。景気内閣の呼声は裏切られて物価の激動、貿易の不振、通貨の膨張、国民負担の増大など、数へ来れば、悉く国利に反し、民意に悖るものである」と、犬養内閣の金再禁政策を批判していた⁴⁹。渡辺の去就は定まっておらず、興民会は動揺していた⁵⁰。渡辺の落選の背景には一貫しない姿勢があったと思われる。同年12月、落選後の渡辺は中野に

従って安達謙蔵の国民同盟に合流する⁵¹。

以上のように、1932年2月の第3回普通選挙において、第3区は政権与党の政友会が野党の民政党に圧勝した。

だが、政友会は同年7月に函館支部を解散させる。7月8日、木下成太郎北海道支部長は函館市を訪問、林儀作ら政友会函館支部委員と会見し、「昭和四年四月四日、立憲政友会函館支部解消に関する役員会の決議に依りて定められたる委員十五名の中より、更に一任をうけたる小委員、相会し、本日、立憲政友会北海道支部長、木下成太郎氏と隔意なき協議を行ひ、現下の政局重大なるに鑑み、即日、函館支部の名義を削除して北海道支部の統制下に吾党創立の精神を高揚せんことを申し合わせたり。右の結果、支郡、又は樞要町村に新たに倶楽部を結成し、倶楽部相互間の連携は別にこれを定む」という覚書を作成した⁵²。ここに函館支部は解散したが、後年の政友会はその代償を支払うことになる。

第2章 政党内閣崩壊後における北海道第3区

第1節 衆議院議員補欠選挙と道南政治の変動

1935年6月20日の衆議院議員補欠選挙（林儀作と佐々木平次郎の病死にともなう）において、民政党の恩賀徳之助（民政党函館支部長、保険代理業、函館市）、政友会の登坂良作（函館市会議長、弁護士、函館市）が当選した。政友会は登坂とともに富合才一郎（道議、会社員、函館市）を擁立したが、1議席を減じた。

前著において指摘したように、政友会北海道支部長の木下成太郎は床次竹二郎の一派（政友会を脱党し、岡田啓介内閣を支持）への合流を企図し、5月25日の政友会幹部会において除名協議の対象となっていた。衆議院補欠選において、木下は岡田内閣の与党の民政党との無競争協定（政民両党で1議席を分け合う）を志向したが、野党の立場から政友会本部や北海道選出代議士の東武は2名の擁立を主張した。木下が譲歩し、北海道支部は登坂と富合の擁立を決定した。この人選を政友会本部が容認しなかったため、29日に

北海道支部は候補者決定を本部に一任した⁵³。

ここで着目したいのは、政友会函館支部が解散したため、北海道支部が候補者調整を行わなくなっただけではなかったことである。6月2日の『函館毎日新聞』は政友会について「未だに公認決定行き悩みにあるが、北海道支部に於いても公認決定による今後の紛糾を恐れて過日、一切を挙げて本部に一任した」と報じ、5日の同紙は「問題を斯く迄紛糾せしめた原因の一つは党本部の変転極まりない動揺にもあるが、他方、支部が公認問題を一切挙げて本部に一任した結果、地元民の実際意向が那邊にあるものか、本部幹部には容易に察知し難い事情にある」と評している⁵⁴。5日の政友会総務会において候補者調整を一任されたのが鈴木派（鈴木喜三郎を中心とする最大派閥）に近い東だった。東は島村悦郎（道議、弁護士、函館市）を擁立した⁵⁵。

6月5日の政友会北海道支部幹部会（札幌市）は、「今秋には衆議院の解散すらも予想されている今日、徒らに各候補者が競つて公認を争ふことは唯に競争相手の民政派に漁夫の利を占めさせるのみならず、延いては次回総選挙にも多大の支障を来す処ある点を考慮して、この際、各候補者間に妥協を行ひ、出馬は公認二名に限つて逐鹿戦に臨ましめることに決定」した。翌日、板谷順助（北海道選出代議士）が支部代表として函館市を訪問し、登坂と会見した⁵⁶。5月25日の『旭川新聞』によると、23日の政友会北海道支部幹部会は「現市会議長登坂氏は木下支部長と個人的関係深く、木下氏の政民妥協説の根本精神は登坂氏を推して新党樹立に登坂氏一枚を導入れんとする一石二鳥の案と見るべきであるから、この際、登坂氏を公認することは事実上、党を強化するものとはならず、むしろ登坂氏を排して島村、富合両氏を公認すべきであるといふ木下支部長一派を弾劾する敵本主義的強硬なる空氣に支配された」と言う⁵⁷。すでに、第2区からは代議士の林路一（木下に近い）が床次支持を掲げ、政友会を脱党していた。北海道支部の反木下派（東ら）は登坂が「床次系」だったため、板谷の派遣によって立候補を断念させようとしたのである。だが、6月7日に登坂は出馬し、形勢不利と見た島村は立候補を断念した⁵⁸。

ここで注意したいのは、登坂の説得役の板谷が鈴木派と木下ら「床次系」

の中間派だったことである⁵⁹。板谷は6月9日の『小樽新聞』において「候補者の決定には地元同志の意向と空気を察知して、支部が本部に報告するのが立前で、本部も支部の意思を尊重して決定すべきもので、今回の第三区補選については支部と本部との間に多少の行違ひのあつたのは遺憾の至りである。登坂氏は函館の有力者で一つ働いてもらひたいので、出馬を慫慂したわけである。つまり、落ちつく処に落ちついたのであらう。これを新党派の意思を代表して云々といふ事が政治家の所出進退は今日の議会政治上からも軽々にすべきものでないが、現在の政党に国民はあきたならぬ思ひをして居るのは事実だ。我党の現状についても自分はあきたらぬ」と述べている⁶⁰。政友会本部や東は板谷が登坂を辞退させることを期待していたが、板谷には「床次系」への同情もあり、登坂は出馬を決意した⁶¹。

登坂が突如として立候補を決意したのは板谷の状況主義的態度だけではなく、函館市において渡辺派の支持を得たことが大きい。渡辺泰邦の個人後援会の函館市民同盟は渡辺の擁立を断念し、登坂の擁立を決定した。6月13日の声明書の中で、函館市民同盟は「飽迄無競争無投票に賛成し、政友会登坂良作氏、民政党恩賀徳之助氏をして、選出せらるる様、極力斡旋したり。然るに政党の無力無統制に災いされ、妥協ならず、遂に、第三区は党利党略による政争の巷と化したり」と述べている。12日の『小樽新聞』によると、渡辺と登坂には「次期選挙に対する默契」があったと言う⁶²。このように、渡辺は木下支部長の無競争方針を支持し、登坂を支援することで、次期衆議選挙への出馬の布石とした。政友会の床次系は既成政党打倒を掲げる渡辺と提携したのである。

選挙結果に着目すると、恩賀は函館市で9,168票、松山支庁で1,955票、渡島支庁で5,091票、登坂は函館市で6,557票、松山支庁で1,951票、渡島支庁で4,551票、富合は函館市で2,303票、松山支庁で1,406票、渡島支庁で3,676票を得た⁶³。選挙後、民政党総務の頼母木桂吉は「民政党は函館市において九千票、郡部において七千票を得た訳である。政友会では床次系の候補者が当選したが、これによつて当選者二名とも政府系で、政友会の総裁派なるものは選挙において凋落したことを立証した」と語っているように⁶⁴、

鈴木派の敗北は明らかだった。

1935年6月の衆議院議員補欠選は、第3区における政友会が第3党にまで後退する端緒となる。

第2節 1936年2月の第4回普通選挙と政友会の後退

第4回普通選挙（岡田啓介内閣が実施）における第3区の当選者は、民政党公認の大島寅吉（前代議士）、中立の渡辺泰邦（元代議士）、政友会公認の登坂良作（前代議士）、落選者は政友会公認の須田幸太郎（漁業、函館市）と民政党公認の白尾宏（会社員、函館市）である（〔表1〕）。民政党は1議席減の1議席、政友会は現状維持の1議席、国民同盟を経て東方会（中野正剛の政策研究団体）に参加した渡辺が1議席を獲得した。なお、渡辺が中立で立候補したのは、東方会が政治結社となるのが同年3月のためである。同時期、渡辺は二月会結成（大衆組織確立を企図した「維新戦線統一」運動）の際、東方会代表として杉浦武雄とともに参加した。同会は第4、5回普通選挙において北海道第4区から立候補した国民協会の赤松克磨が中心である⁶⁵。前年6月の衆議院補選で登坂を推したことが渡辺の有利に作用したのだろう。

政党別得票結果を見ると、岡田内閣の与党の民政党の得票は函館市、渡島支庁管内において、政友会を上回った。函館市における政友会の得票は前回選挙から半減し、「その他」（中立の渡辺）を下回っている。他方、桧山支庁管内では、岡田内閣の野党の政友会が与党の民政党を上回った（〔表2〕）。桧山支庁管内では、泊、乙部、奥尻、久遠村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表3〕、〔表4〕）。渡島支庁管内では、福山、上磯町と湯川、亀田、大島、小島、大沢、福島、吉岡、大野、茂別、七飯村において政友会、八雲町と尻岸内、楳法華、銭亀沢、戸井、尾札部、白尻、知内、木古内、鹿部、砂原、落部、長万部村において民政党が上回っている。森町では政民両党が同数だった。福山町と尻岸内、大沢、吉岡村では渡辺の得票が政民両党を上回っている（〔表5〕、〔表6〕、〔表7〕）。

候補者別に得票数を検討すると、政党内閣期における3度の選挙と同様、函館市の得票は当選者の順位に直結した（〔表1〕）。桧山支庁管内では、政友

会が泊、厚沢部、乙部、貝取淵、久遠村において登坂、民政党が利別、東瀬棚村を除く全町村において大島に集票した。渡島支庁管内では、政友会が樞法華、亀田、臼尻、大沢、知内、木古内、砂原、落部村において登坂、民政党は八雲町と尻岸内、長万部村を除く全町村において大島に集票した。他方で、渡辺は福山町と尻岸内、小島、大沢、吉岡、木古内、七飯村において得票数1位になった。渡辺の進出のため、政友会は登坂、民政党は大島に集票し、1議席を確保する戦略を選択した。

1936年2月の「肅正選挙の限界」において、渡辺は代議士の地盤擁護を批判し、「国防と外交を論じ、産業の開発と、大衆生活の向上に苦慮するよりも、鉄道敷設線の速成に狂奔し、三等郵便局の設置に夢中になっている方が、遙かに当選し易いのである」と主張していた⁶⁶。渡辺は「大衆生活の向上」を前面に出していた。中小資本、農民、都市中間層の経済利益の擁護は国民同盟以来、東方会が掲げていた政策である⁶⁷。東方会の政策は函館市民に受容されやすいが、渡島地方の有権者には渡辺に地方利益の実現を期待した側面もあっただろう⁶⁸。渡辺の進出の結果、函館市と渡島支庁管内の民政党の得票は前回選挙から変化していないが（〔表2〕）、政友会の得票は激減している。政友会は函館支部を解散したことで、道南の有権者の意向を知ることが困難となった。

以上のように、1936年2月の第4回普通選挙において中立の渡辺が2位当選を果たし、道南の二大政党時代は終焉を迎えた。

第3節 1937年4月の第5回普通選挙と東方会の進出

第5回普通選挙（林銑十郎内閣が実施）における第3区の当選者は民政党公認の大島寅吉（前代議士）、東方会公認の渡辺泰邦（前代議士）、政友会公認の田代正治（道議、漁具商、函館市）、落選者は民政党非公認の大田半三郎（道議、製粉業、八雲町）と幡野直次（道議、八雲酪農販売組合長、八雲町）である。大田は渡島支庁管内において得票数1位だが、幡野との同士討ちのため、落選となった（〔表1〕）。民政党と政友会は現状維持であり、渡辺は東方会候補として当選を果たした。なお、林内閣に関しては政民両党と東方会

が野党であり、第5回普通選挙は道南初の「与党なき選挙」となった。

政党別得票結果を見ると、民政党の得票は函館市、松山、渡島支庁管内において、政友会を上回った。なお、東方会の渡辺の得票は函館市と渡島支庁管内において、政友会を上回っている。松山、渡島支庁管内では民政党の得票が前回選挙を上回った（〔表2〕）。政友会は唯一優位を保持していた松山支庁管内でも党勢を後退させ、道南政治における民政党の優位は確立された。松山支庁管内では、全町村において、民政党が政友会を上回った。政友会への批判票の大部分は東方会ではなく、民政党が吸収している（〔表3〕,〔表4〕）。渡島支庁管内の全町村においても、民政党が政友会を上回った。なお、福山町と尻岸内、小島、大沢村では、東方会の渡辺の得票が政民両党を上回っている（〔表5〕,〔表6〕,〔表7〕）。政友会の後退の背景には、1937年2月の総裁代行制（鳩山一郎、中島知久平、前田米蔵、島田俊雄）移行と派閥対立（鳩山派と中島派）にともなう混乱があった。例えば、政友会道議の広部太郎（農業、上磯町）は1930年2月の第2回普通選挙において上磯公有倶楽部会長として佐々木平次郎を支援していたが⁶⁹、1937年4月の第5回普通選挙では政友会本部から公認を得られず、出馬辞退に追い込まれている⁷⁰。

候補者別に得票数を検討すると、第2、3、4回普通選挙と同様、函館市の得票は当選者の順位に直結した（〔表1〕）。松山支庁管内では、民政党が泊、上ノ国、乙部、熊石、奥尻、久遠村において大島に集票した。渡島支庁管内では、銭亀沢村において大島、八雲町と長万部村において大田に集票した。民政党は候補者乱立にともなう同士討ちの傾向にある。渡島支庁管内において大田の集票が広域で成功していれば、民政党は第3区において、政友会を「議席なし」に追い込むことも可能だっただろう。他方、東方会の渡辺は、熊石、貝取潤村（松山支庁管内）、福山、上磯町と尻岸内、大島、小島、大沢、吉岡村（渡島支庁管内）において得票数1位となった⁷¹。

民政党候補であり、ともに八雲町出身の大田と幡野の対立に着目する。第一次世界大戦期の「でんぷん景気」で財を成した大田（片栗粉を製造）は1924年5月の第15回衆議院選（第11区、渡島支庁管内）において、政友本党候補として黒住成章（政友会）に敗北⁷²、その後は民政党に合流する。小選

挙区制から中選挙区制への移行の結果、渡島支庁管内は函館市、桧山支庁管内とともに、第3区に編入された。普通選挙実施以降、民政党の候補者は函館市に偏重し、大田は立候補できなかった。大田は道議に5回当選、八雲中学校の誘致、熊石道路の開発に功績を残した⁷³。他方、幡野は1932年に北海道製酪販売組合連合会監事となり、八雲酪農販売組合を創設、組合長を40年間務める⁷⁴。幡野の民政党入党は1928年7月、道議選に立候補した時である(後述)。1937年4月の第5回普通選挙の立候補挨拶において大田は「顧みれば大正十三年の衆議院議員選挙に渡島支庁管内より立候補致し、各位の熱烈なるご支援を辱ふしたるに不拘、僅少の差を以て敗残に帰し、御厚意に背きました事は自己不徳の致す処、慚愧に耐不と為し、爾来、修養精進の境地に自重自戒隠遁雌伏する事実に至有四年に及んだのであります」、「政治的運命の興廃は此の一戦にあり」と有権者に訴えたが⁷⁵、幡野との共倒れとなる。両者の支持基盤の差異が八雲町内の対立を惹起させ、民政党の地方組織の統制を乱す結果となった。このことは、道議選ですで見られたが(後述)、国政選にも波及したのである。

ここで視点を換えて、東方会の渡辺に着目したい。『東大陸』(1936年7月号)の座談会において、東方会の杉浦が「政党政治、議会政治は資本主義を維持する為の政治組織なのです。その役目を持った政党が資本主義に反逆するといふ場合はあり得ない。随て議会政治、政党政治に身を置く者がどんなに地団駄踏んでもどんなに良心的になつても、今日期待せらるる政治の動向が大衆生活の安定といふことにある以上は、政党政治家の力に依つてその政治が出来ようとは思はないうです」と述べたことに関して、渡辺は「杉浦さんの先程のお話の中に、政党はもうその機能を失ひ、その信用を失つたといふ様に私は聴いたのですが、実際非常に若い人達はそのことを痛感しているのです。党の幹部は怪しからぬと言つて、三日か四日に亘つて、大分兩大政党も、揉めたらしいんですが、結局なんだかんだで納つてしまつて、あの修正を承認し、あんな不穩文書取締法を修正して通過せしむる様になつたのはやはり何処かに強い根が残つて居つて、若い新進の代議士が如何にいきり立つても、自分の次の選挙といふことを考へるとそれがおちゃんになるのではな

いか」と発言している⁷⁶。渡辺の立場は政民両党の現状に不満を持つ反主流派も選挙における非公認を恐れて党幹部に従順となり、「大衆生活の安定」を実現できないというものだった。視点を換えると、選挙対策として、渡辺は政民両党と東方会との差異化を企図したとも考えられる。しかし、選挙結果が示すように、道南の民政党への支持は根強く、渡辺の戦略は成功していない。さらに、東方会が掲げる農民、中小企業、労働者に対する社会政策は準備拡張、戦争遂行がもたらす社会、経済矛盾を抑制する手段にすぎなかった⁷⁷。

1937年7月に勃発した日中戦争が長期化した結果、函館市では上記の矛盾が顕在化する。例えば、風見章は「渡辺泰邦氏と交詢社にて会見、北海道の近況をきく。同氏函館より昨日帰京の由なるが、同地にては炭、石炭の不足甚しく、配給に当りては何れも列をなして順番を待つこと毎日なりといふ。為めに民衆の神経自から鋭敏となりて、炭、石炭等を買ひためたる家庭を探し出す等のことあり、放置すべからざるに因り、警察官より相談的に申込みて、買ため分を分与するの途をとりつつあり。かかる有様なるを以て、事態の裡に不穩の形勢を看取せざるを得ずとの話也」と、1939年11月29日の日記に記している⁷⁸。渡辺は1938年11月、東方会と社会大衆党の合同運動の委員となったが、両党の合同は成功せず、1940年に東方会を脱党する⁷⁹。

以上のように、1937年4月の第5回普通選挙において道南政治の三党鼎立状況は確立された。第1党の民政党は大田と幡野の対立のため、2議席の獲得を逸した。東方会は函館市で得票を伸ばし、民政党の対抗政党となった。政友会は後年、中島派に参加する田代（前代議士の登坂良作と同様、木下成太郎支部長に近い）を漸く当選させるに止まり⁸⁰、第3党に転落した。

第3章 道南の北海道会議員選挙

第1節 1928年8月の第9期道議選と民政党函館支部

第9期道議選（田中義一内閣下で実施）において、函館市では民政党の大島寅吉と前田卯之助（道議）、政友会の林儀作（道議）と登坂良作（道議）が

当選した。落選者は政友会の桶正義（無尽業，函館市），労働農民党の加藤貫一，中立の榊原儀作（小学校教員，函館市），社会民衆党の鈴木民治（弁護士，函館市），中立の川原石太郎（土木業，函館市）である。1930年5月，政友会の寺尾庄蔵が前田の代議士転身にもなう補欠選挙で当選する。政民両党は当選者数で同数だが，得票数では政友会が民政党を上回った（〔表8〕）。

桧山支庁管内では政友会の石田連治（江差電気会社取締役，江差町）と中立の北林屹郎（道議）が当選した。落選者は政友会の中沢佐右衛門（新聞記者，瀬棚町）と中立の加藤脇三郎（雑貨商，函館市）である。民政党函館支部は大島重一郎（道議）を擁立しようとしていたが，大島は北林に配慮し，立候補を辞退した⁸¹。

渡島支庁管内では政友会の宇喜多甫（農業，七飯村），中立の川内精作（道議，漁業，福山町），民政党の黒島豊太郎（漁業，銭亀沢村）と大田半三郎（道議）が当選した。落選者は政友会の岡部五郎（医師，八雲町）と山下順三（代書業，福島町），民政党の幡野直次，社会民衆党の鶴本徳太郎（同党函館支部の中心人物，新聞記者，函館市）である（なお，幡野は1930年5月，黒島の死去にもなう補欠選挙で当選）。民政党は当選者数で政友会を上回ったが，得票数では下回った（〔表8〕）。1位当選の宇喜多は1928年8月5日の湯川村の演説会において，数名の農学士の応援を得て「農漁村の振興を説きつつある為，各地に共鳴者多く氣勢一段と昇まつた」⁸²。宇喜多は政友会の積極政策の恩恵を受けたと言える。

他方，3候補（大田，岡部，幡野）の登場の結果，八雲町の有権者は混乱した⁸³。民政党の候補者乱立の背景には7月15日，森町に開催された民政党函館支部幹部会があった。同会には函館支部から前田幹事長，大島寅吉，斎藤栄三郎，森町有志22名，長万部村有志数名，八雲町有志40名が参加した。幹部会は森町と長万部村の有志のみで予選投票を行い，幡野の擁立を決定した。だが，17日の八雲民政倶楽部評議員会（八雲町）は「大田氏の入党を認め，幡野氏に対しては一部黨員から入党手続きに疑ふべき点あり。殊に，同氏の入党は黨員結束を乱す虞れありとて，入党を拒絶して」，大田を推薦した。これに対して，道南の民政黨員の中に「函館支部幹部会の予選を蹂躪するの

行動」という批判が高揚した⁸⁴。森町と長万部村は幡野を推し、幡野の地元の八雲町は大田を推したのである。25日の民政党函館支部発会式（床次竹二郎が参加）において、大田と幡野は道議候補として、前田、大島、黒島とともに推薦された⁸⁵。

大田が民政党函館支部から疎まれた要因として、政友本党以来、床次に近かったことが挙げられる。7月26日、函館支部長の平出喜三郎が突如、民政党を脱党し、政友会に入党した。8月2日には床次が民政党を脱党、党内は混乱した。民政党函館支部幹事長の恩賀徳之助は「旧本党系の民政党脱党に就いては函館支部として道会議員選挙に影響は全然ない。又平出氏の行動に相関連して内部の動揺するやうな事も全然あるまい。ただ、郡部の道議選挙は大田半三郎君が本党系である為め、多少の動揺は免れないかも知れない」と述べている⁸⁶。民政党函館支部は大田が平出を追って政友会に鞍替えすることを警戒していたように思われる。

以上のように、第9期道議選において、民政党函館支部は分裂騒動（平出支部長と床次の民政党脱党）に直面しながら、函館市では政友会と議席を分け合った。だが、桧山支庁管内では自党候補を選出することができず、渡島支庁管内では候補者調整に失敗し、与党の政友会の進出を許すことになった。なお、前田、大島、林、登坂は後年、代議士として国政に進出する。

第2節 1932年8月の第10期道議選と八雲町

第10期道議選（斎藤実内閣下で実施）において、函館市では民政党の前田卯之助（元代議士）、政友会の富合才一郎、樋渡道一（弁護士、函館市）、島村鋭郎が当選した。落選者は、民政党の厚谷厚（弁護士、函館市）、政友会の白尾宏、中立の野上繁（新聞業、函館市）である。1932年7月25日、政友会北海道支部長の木下成太郎は白尾を除く3人を公認した⁸⁷。他方、23日の民政党函館支部大会は若槻礼次郎総裁を迎え、候補者調整にも成功した⁸⁸。だが、函館支部を解散し、4候補の同士討ちとなった政友会⁸⁹の前に、3議席を奪われることになった。

安達謙蔵の国策研究会に所属していた渡辺泰邦は、独自候補を擁立せず⁹⁰、

興民会として前田を応援した⁹¹。両者の提携は1932年2月の第3回普通選挙（渡辺と前田は民政党候補）の段階で見られる。八雲町では前田が「私が若し今回の選挙に於いて落選する様な事があれば、私の代わりとして必ず渡辺君をして当選の栄を得せしめられたい」と演説していた⁹²。8月の道議選では、渡辺の支持が前田への集票となり、厚谷は犠牲になった。函館市の民政党の得票は政友会を下回り（〔表8〕）、「金城湯池の地盤を死守」しようとした民政党函館支部⁹³は敗北した。

桧山支庁管内では中立の北林吃郎（道議）と政友会の石田連治（道議）が当選した。落選者は政友会の中沢佐右衛門（新聞社長、瀬棚町）である。民政党は地盤擁護の観点から泊村の飯田富五郎を擁立しようとしていたが⁹⁴、実現せず、自党候補を擁立することができなかった。

渡島支庁管内では民政党の幡野直次と大田半三郎、政友会の広部太郎と岡部五郎が当選した。落選者は中立の三瓶萬吉（水産会長、銭亀沢村）と政友会の山下順三（漁業、大島村）、中立の千葉文夫（旅館業、七飯村）、政友会の宇喜多甫（道議）である。七飯村における同士討ちの結果、千葉と宇喜多はともに落選した⁹⁵。得票数では、政友会が民政党を上回っている（〔表8〕）。8月2日には顧問の俵孫一が大田と幡野の応援演説を八雲町で行なうなど⁹⁶、民政党は本部が積極支援している。7月20日の『八雲新報』は「四年前の政情と各候補の有権者に対する感情等も大いに変化を来たし居るので、八雲町や森町、長万部だけでも相当の変化がみられる」と報じている⁹⁷。政党内閣の崩壊は渡島地方の有権者の動向にも影響を及ぼしていた。

ここで着目したいのは八雲町から、幡野、大田、岡部という3候補が当選したことである。8月15日の『八雲新報』の社説は「政治的自覚が八雲町及び其の隣村に於て他町村のそれに比し、一步を先んじて居たことと、選挙に對し、或統制を有して居たことが特に有意義であつたかに思ふ」と誇っている。八雲町の隣村の長万部村は八雲町の3候補を応援していた⁹⁸。他方、幡野と大田は同士討ちを展開し、八雲民政倶楽部会長の高木正栄は選挙直後、辞任に追い込まれている⁹⁹。八雲町の3候補の当選は政党間競合と別に、同町と近隣町村（森町と長万部村）が函館市への対抗意識を強めた結果のよう

に思われる（函館市近隣の七飯村の2候補はともに落選）。

以上のように、第10期道議選は道南全域において、政友会の得票は民政党を上回った。だが、函館市や渡島地方の有権者は政党よりも候補者個人を選挙する傾向を強めており、政友会の勝利と見なすことは難しい。政友会はずでに函館支部を解散させており、組織による統制は機能していなかった。なお、富合、白尾、幡野、大田は衆議院選に立候補するが、いずれも落選する。

第3節 1936年8月の第11期道議選と二大政党

第11期道議選（広田弘毅内閣下で実施）において、函館市では民政党の鳥井小次郎（米穀商、函館市）、岡田幸助（海産商、函館市）、山崎藤太郎（漬物商、函館市）、政友会の田代正治が当選した。落選者は、民政党の前田卯之助（道議）、政友会の西島儀助（会社員、函館市）、樋渡道一（道議）、浜口市蔵（会社員、函館市）、池田啓蔵（木材業、函館市）、中立の斎藤友二郎（木材商、函館市）である。函館市の政友会の得票は前2回の道議選から激減し、民政党を大きく下回った（〔表8〕）。民政党の勝因は「岡田、山崎、鳥井三候補のスクラムを組んでの運動」¹⁰⁰にあった。1936年8月4日の『函館毎日新聞』は民政党について「三名共、絶対獲得を期して地盤の協定等も確然たるものがあり。大島代議士以下、必死の陣を張っている」と述べている。対照的に、政友会は浜口と池田が非公認で立候補し、同士討ちとなった。12日の同紙は「民政三名を脱取、政友、無念の惨敗」と大きく報じている¹⁰¹。

桧山支庁管内では中立の北林吃郎（道議）と政友会の大東勝市（農業、東瀬棚村）が当選した。落選者は政友会の石田連治（道議）である。「江差の偏在を嫌って」立候補した大東は石田との同士討ちを制した¹⁰²。桧山地方においても、地域対立が道議選に波及している。

渡島支庁管内では政友会の広部太郎（道議）と川村善八郎（海産商、森町）、民政党の幡野直次（道議）と大田半三郎（道議）が当選した。落選者は政友会の千葉文夫（会社員、七飯村）、中立の松本隆（漁業組合長、福山町）、政友会の山下順三、民政党の米沢勇（漁業、八雲町）と堀川源三郎（漁業、小島村）である。政友会の得票は、民政党を上回った（〔表8〕）。八雲町の民政

党は3人の候補者（幡野，大田，米沢）による同士討ちとなった¹⁰³。松本，山下，堀川の「松前三人組」¹⁰⁴は揃って落選した。八雲町内の対立だけではなく，森町，松前地方の地元候補擁立など，地域間の対抗が激化していることがわかる。

以上のように，第11期道議選は民政党が函館市において政友会に大勝した。政友会の退潮は函館市において顕著となったが，松山，渡島支庁管内では依然として優位を保っていた。だが，両地方では地域間対立が激化しており（それにともなう地元候補擁立），政友会の得票を有権者の支持と見なすことは難しい。民政党は函館市で候補者調整に成功したが，八雲町の3候補擁立に見られるように，渡島支庁管内では候補者を濫立した。なお，田代は1937年4月の第5回普通選挙に当選する。

結

最後に，昭和戦前期の選挙結果から，道南における有権者の投票行動を地域ごとに考察する。

北海道第3区では，5度の衆議選（第1～5回普通選挙）において，函館市から多くの得票を得た候補者が当選を果たした。1930年2月の第2回普通選挙以降は函館市における得票数が当選順位に直結した（〔表1〕）。函館市は，政党内閣期の第1，2，3回普通選挙において得票が政友会と民政党に集中し，非政民勢力が進出する余地は少なかった。だが，政党内閣崩壊後の第4，5回普通選挙においては，非政民勢力（渡辺泰邦）が政友会を上回る得票を得た（〔表2〕）。だが，道議選では二大政党に得票が集中しており，第9，10期道議選では政友会，第11期道議選では民政党が勝利し，非政民候補を圧倒している（〔表8〕）。

松山支庁管内に着目すると，1級町村は江差，瀬棚町，2級町村は泊，厚沢部，乙部，熊石，奥尻，東瀬棚，太櫓，貝取潤，久遠村である（上ノ国，利別村は第1回普通選挙を除き，1級町村）。乙部，久遠村は全5回の選挙において民政党が得票1位となった。東瀬棚，太櫓村は政友会（第1，2，3，

4回普通選挙)から民政党(第5回普通選挙)という得票の移動が見られる([表3], [表4])。だが、3度の道議選では政友会が圧勝し、民政党は候補者を擁立することができなかった([表8])。

渡島支庁管内に着目すると、1級町村は福山、上磯、森、八雲町と湯川(第5回普通選挙から町)、銭亀沢、戸井、亀田、福島、木古内、大野、七飯、長万部村、2級町村は尻岸内、榎法華、尾札部、臼尻、大島、小島、大沢、吉岡、知内、茂別、鹿部、砂原、落部村である。銭亀沢、木古内、落部村は全5回の選挙において民政党が得票1位となった。福山町は政友会(第1、2、3回普通選挙)から非政民勢力(第4、5回普通選挙)という得票の移動が見られる([表5], [表6], [表7])。3度の道議選ではいずれも政友会の得票が民政党を上回っている([表8])。

第3区では、二大政党制絶頂期の3度の選挙において、政友会と民政党による二大政党化が顕著なものとなり、政権与党が一貫して野党を上回る得票と議席を得た。道南の有権者の行動には、政党内閣期を通して、政権与党支持の傾向が見られた。これは、北海道拓殖政策の優先順位が低く、地域開発が停滞していた道南の歴史的背景と関係しているように思われる。政党内閣崩壊後の2度の衆議院選(第4、5回普通選挙)では、民政党、東方会、政友会の三党鼎立状況となった。第1党の民政党と第3党の政友会の明暗を分けた重要な要因として、函館支部の有無が挙げられる。政友会は登坂良作、田代正治という党内反主流派(木下成太郎支部長に近い)を当選させただけだった。民政党は函館市から大島寅吉を連続で1位当選させる一方、渡島支庁管内の地域対立(八雲町に象徴される)を統制できなかった。既成政党批判を掲げた東方会は第2党に躍進したが、渡辺の進出は函館市と渡島地方の一部に限定されていた。道議選は東方会の進出が見られず、二大政党に得票が集中した。だが、1932年8月の第10期道議選では民政党の前田卯之助、1935年6月の衆議院補欠選では政友会の登坂を支持するなど、函館市の渡辺派(興民会、函館市民同盟)は、道南政治を左右し続けた。

1942年4月の翼賛選挙(東条英機内閣下で実施)において第3区から当選したのは真藤慎太郎(登坂、田代と同様、日魯漁業の有力者)、旧民政党の大

島, 元東方会の渡辺であり, いずれも推薦候補だった。渡辺の得票は 12,654 票であり¹⁰⁵, 前回選挙から変化していない。旧東方会の多くが中野正剛とともに東条内閣に反抗, 非推薦候補として落選したことを考慮すると, 東方会からの脱党は渡辺の有利に作用したように思われる。渡辺は, 民政党, 国民同盟, 東方会と脱党を繰り返したが, 道南における個人の支持基盤は根強かったのである。

- 1 函館市編さん室編『函館市史』(通説編 第3巻) 函館市 1997 年, 38 頁。政友会札幌支部に関しては拙著『戦前期北海道政党史研究』北海道大学出版会, 2019 年, 14 頁。本論では北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『北海タイムス』を『北タイ』, 北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『小樽新聞』を『樽新』, 北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『函館毎日新聞』を『函毎』, 函館市中央図書館所蔵(縮刷版)『函館新聞』を『函新』, 旭川市中央図書館所蔵マイクロフィルム『旭川新聞』を『旭新』, 八雲町立図書館所蔵『八雲新報』を『八雲』, 八雲町立図書館所蔵『道南民報』を『道南』と略記し, 年月日のみ表記する。
- 2 政友会函館支部は 1932 年 7 月, 札幌市の同党北海道支部の統制下に置かれた(木下成太郎先生伝刊行会編『木下成太郎先生伝』みやま書房, 1967 年, 58, 59 頁)。民政党函館支部はこれより 7 年遅く, 1939 年 12 月, 札幌市の同党北海道支部に合併された(拙稿「立憲民政党北海道支部と函館支部」『北海道史研究協議会会報』(160) 2020 年を参照)。
- 3 北海道大学附属図書館北方資料室, レンセン文庫所蔵, 小野田正編『佐々木平次郎伝』(正) 1937 年, 309 頁。
- 4 国立国会図書館憲政資料室所蔵「北海道第三区(民政) 北林屹郎 宮武茂平編「普選第一次敗将の語らひ」(請求番号 587-20) 1928 年, 305 頁。
- 5 熊本第 1 区の事大主義的傾向に関しては, 酒井正文「戦前期二大政党対立下の選挙における地方指導者の事大主義的傾向」『大麻唯男』(論文編) 櫻田会, 1996 年を参照。
- 6 『函毎』(1937 年 4 月 12 日)。
- 7 有馬学「東方会の組織と政策」『史淵』(114) 1977 年, 68 頁, 永井和「東方会の成立」『史林』(61-4) 1978 年, 112, 115, 117, 127, 130, 131 頁。渡辺の経歴に関しては, 松枝大貴「昭和戦前期における第三党に関する一考察」『慶應義塾大学大学院法学研究科論文集』(57) 2017 年, 247 頁参照。
- 8 第 2 区と第 4 区の非政民勢力に関しては, 拙稿「昭和戦前期の北海道第 2 区における政党間競合」『北大文学研究院紀要』(158) 2019 年, 拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第 4 区」『北大文学研究院紀要』(160) 2020 年を参照。

- 9 内務省警保局「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」1926年、『昭和初期政党政治関係資料』（第1巻）不二出版、1988年、18～19頁。
- 10 前掲「第十六回衆議院議員総選挙一覧」。
- 11 前掲『函館市史』（通説編 第3巻）1080、1081頁。
- 12 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』96頁。
- 13 『函毎』（1928年2月5、7日）。
- 14 松前町史編纂室編『松前町史』（通説編 第2巻）松前町、1993年、1060頁。
- 15 前掲『佐々木平次郎伝』（正）232、235頁。
- 16 江差町史編纂室編『江差町史』（第6巻 通説2）江差町、1983年、973、734頁、江差町史編纂室編『江差町史』（第9巻 通説3）江差町、1994年、367、476頁。
- 17 前掲『江差町史』（第9巻 通説3）181頁。
- 18 田中和夫『北海道の鉄道』北海道新聞社、2001年、216頁。
- 19 前掲『松前町史』（通説編 第2巻）1055頁。
- 20 『函毎』（1928年2月14日）。他方、民政党の平出は地租移譲論批判を掲げていた（『函毎』（1928年2月15日））。
- 21 稲川広光「郡部に於ける政党勢力の現状と興民会入会の動機に就いて」函館市中央図書館所蔵『興民』（1-3）1928年、33、34頁。
- 22 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
- 23 『樽新』（1930年2月9日）。
- 24 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
- 25 前掲・稲川「郡部に於ける政党勢力の現状と興民会入会の動機に就いて」34頁。
- 26 『函新』（1930年2月4日）。
- 27 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
- 28 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』124頁。
- 29 「興民会々報」『興民』（1-1）1928年、77頁。
- 30 「興民会復興大会と演説会の壮観」『興民』（1-3）1928年、71頁。
- 31 「興民会綱領」『興民』（1-1）1928年、73、74頁。
- 32 同上、78、79、80頁。
- 33 「社告」『興民』（2-4）1929年。
- 34 小川弥四郎「民政党函館支部の存廃」『興民』（2-5）1929年、26頁。
- 35 同上、26～29頁。
- 36 前掲『松前町史』（通説編 第2巻）1061頁。
- 37 前掲『佐々木平次郎伝』（正）345頁。
- 38 前掲「興民会復興大会と演説会の壮観」75頁。
- 39 岡田幸助「渡島半島の開発は漁港修築を以て最大の急務とす（一）」『興民』（1-4）1928年、29、30頁。

- 40 小川弥四郎「道南諸町村の發展と道路問題」『興民』（2-1）1929年，24，25頁。
- 41 『函新』（1930年2月4日）。
- 42 『八雲』（1932年2月10日）。
- 43 前掲「第十八回衆議院議員総選挙一覧」。
- 44 『函毎』（1932年2月16日）。
- 45 『樽新』（1932年2月19日）。
- 46 『樽新』（1932年2月6日）。
- 47 『樽新』（1932年2月2日）。
- 48 拙著『立憲民政党と政党改良』北海道大学出版会，2013年，67，68頁。
- 49 『函毎』（1932年2月6日）。
- 50 『樽新』（1932年2月3日）。
- 51 前掲・松枝「昭和戦前期における第三党に関する一考察」247頁。
- 52 『函毎』（1932年7月10日）。木下は1929年4月1日，東京で政友会幹部と懇親会を行った（『北タイ』（1929年4月5日））。函館支部解散は党本部の意向の可能性が
ある。
- 53 詳細は，前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』182～186頁を参照。
- 54 『函毎』（1935年6月2，5日）。
- 55 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』186頁。
- 56 『函毎』（1935年6月7日）。
- 57 『旭新』（1935年5月25日）。
- 58 『函毎』（1935年6月8日）。
- 59 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』176頁。
- 60 『樽新』（1935年6月9日）。
- 61 後年の政友会分裂の際，板谷は中島派の木下支部長と決別，久原派に加担する（前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』第7章）。
- 62 『函毎』（1935年6月14日），『樽新』（1935年6月12日）。
- 63 『函毎』（1935年6月21日）。
- 64 『樽新』（1935年6月21日）。
- 65 前掲・有馬「東方会の組織と政策」63頁。
- 66 渡辺泰邦「肅正選挙の限界」『我観』（2月号）1936年，102頁。
- 67 前掲・永井「東方会の成立」120頁。
- 68 1929年段階では渡島支庁長が「後志，石狩，上川等の各支庁管内に対し，或は数十年も後れているのではないかと思はれる位であるが其原因の主たるものは交通機関の不完全である」と述べている（吉村政次郎「下海岸開発に就て」『興民』（2-2）1929年，32頁）。
- 69 前掲『佐々木平次郎伝』（正）347頁。

- 70 詳細は、前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』214頁。
- 71 前掲「第二十回衆議院議員総選挙一覧」。
- 72 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』42頁。
- 73 『道南』（1956年6月1日）。
- 74 『道南』（1956年12月14日）。
- 75 八雲町立図書館所蔵「立候補挨拶」（大田半三郎）1937年。
- 76 「臨時議会検討座談会」『東大陸』（7月号）1936年，48，49頁。1936年5月，広田弘毅内閣が第69議会に提出した不穏文書取締法案は政民両党によって大幅に修正された。
- 77 前掲・永井「東方会の成立」129頁。
- 78 「風見章日記」（1939年11月29日）北河賢三・望月雅士・鬼嶋淳編『風見章日記・関係資料』みすず書房，2008年，141頁。
- 79 前掲・有馬「東方会の組織と政策」66，68頁。
- 80 田代擁立に関しては、前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』第7章を参照。
- 81 『北タイ』（1928年8月4日）。
- 82 『北タイ』（1928年8月7日）。
- 83 『樽新』（1928年7月26日）。
- 84 『北タイ』（1928年7月23日）。
- 85 『函毎』（1928年7月26日）。
- 86 『函毎』（1928年8月2日）。
- 87 『函毎』（1932年7月27日）。
- 88 『樽新』（1932年7月24日，8月3日）。
- 89 『北タイ』（1932年7月25，28日）。
- 90 当初，渡辺は独自候補の擁立を企図していた（『北タイ』（1932年7月20日））。
- 91 『樽新』（1932年7月29日）。渡辺と前田は函館支部長の恩田の排撃で一致していた（『北タイ』（1932年8月17日））。
- 92 『八雲』（1932年2月15日）。
- 93 『北タイ』（1932年8月7日）。
- 94 『樽新』（1932年7月17日）。
- 95 『樽新』（1932年7月30日）。
- 96 『八雲』（1932年8月5日）。
- 97 『八雲』（1932年7月20日）。
- 98 『八雲』（1932年8月15日）。
- 99 『八雲』（1932年8月10，15日）。
- 100 『樽新』（1936年8月6日）。
- 101 『函毎』（1936年8月4，12日）。

- 102 『樽新』(1936年8月6日)。
- 103 『樽新』(1936年7月30日)。
- 104 『樽新』(1936年8月6日)。
- 105 「第二十回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1942年)。